

# 道 徳

北川 忠

## 1 道徳における「創発の学び」とは

創発の学び

道徳では大切にしたいことを「道徳的価値を内面的に自覚し、自分の生活や行動の中に反映していこうとする意欲や態度（道徳的実践力）を育てる」ととらえている。そして、本質に基づく基礎・基本を「道徳的価値に照らして自分をふり返り、自分なりの生き方の指標を持つようとする」として個の内面のあらわれを探ってきた。そして、個の内面のあらわれを「自ら働きかける」と定義し、個と全体との相互関係の中でとらえようとしてきた。これは、個自体の働きかけが活性化されれば、個の学びだけにとどまらず、全体にも影響を与え、個と全体が相互に高まったり、新たな学びが生まれたりする「創発」につながると考えたからである。

集団で学ぶ意味

具体的には、「豊かな心を持ち 自己の生き方を見つめていこうとする姿」というめざす子どもの姿を策定し、追求していった。個の学びの面については、体験を生かしたり、家庭との連携を図ったりする中で、子どもは自分なりの考えや思いを少しずつではあるが表出できるようになってきたのではないかと考えているしかし、個と全体との相互関係については、曖昧な面が多々あったのではと思われる。そこで、昨年度から「集団で学ぶことのよさ」という視点を取り入れ、個が自分自身を見つめる中で、個と個が学びを分かち合ったり、共有したりする様相、個の道徳的価値形成に及ぼす集団の有益性についてもとらえることができないだろうかと研究を進めてきた。（以後「集団」を学級集団ととらえる）

子どもたちにはどの子にもよさがあり、だれもが、よりよく生きたいという気持ちを持っている。この子どもに対して、道徳の学習では、迷い、悩みや苦しみ、弱さやもろさを認めながらも、それを乗り越えて味わうことのできる楽しさや喜び、そして強さや崇高さもあわせ持っていることが人間のよさであり、だからこそ生きていく意味があるということを経験の中で気づかせていきたい。そして、そのような心はだれにでもあると言うことに気づかせていきたい。

以上のことから道徳における「創発の学び」を次のように定義する。

道徳における創発の学び

「ひと」「こと」「もの」にかかわる資料を基にした話し合いでより良く生きるための道徳的価値に気づき 深めることによって自分の生活に反映して 人間性をより豊かにして行こうとすること

## 2 道徳における「学びを深めようとする思い」とは

\* 資料とは副読本ばかりではなく、道徳の学習に使用される様々な素材・話題をさす。

週 1 時間の道徳の時間に学級の中で、教師と子ども達がよりよい生き方について考えたり、話し合ったりする活動を通して、共に望ましい自分の姿を描き、未来に向かって伸びようとする心を育てていく。授業で取り上げられるさまざまな\*資料を通して、子どもたちは今までの自分の経験をふり返り、より良く生きるための価値に迫っていく。その学びの過程で、友達の意見との違いに気がつく場面や共感できる場面など、いろいろな心の動きが発生する。ありきたりの正論ばかりがいつも正しいとは限らないし、必ずしも考えがひとつに定まらないことも多々あるものである。どうすることが正しいのか、時として人は迷うものである。しかし、迷いながらも、ねらいとする道徳的価値に迫る方法は、人それぞれであってもよい。だからお互いの考えを発表し合う中で、お互いの理解も進んでいく

ことになる。そして自分とは違う考え方を排除するのではなく、「そういう考え方もあるのか。」と相手のよさを認めていくことにつながっていく。ここから自分の道徳的価値に対してのとらえ方の幅が広がり、お互いのよさを認め合う心を育むこともできるのではないだろうか。このような、「創発の学び」の実践を積み重ねることが、子どもの心に良い刺激を与え、よりよい生き方の援助をするよい手立てとなるのではないかと考えている。

このことから、道徳における「学びを深めようとする思い」を次のようにとらえる。

学びを深めようとする思い

資料を通した話し合いによって よりよい道徳的価値に気づき  
自分自身を見つめることで 新しい自分の生き方を見つけて  
いこうとする思い

### 3 学びを深めようとする思いを育むために

道徳の学習において、資料が示す表面的な行為や事象しか取り上げなければ、いわゆる耳障りのよいきれいごとの時間となり、そこには自分をふり返ることも人間の生き方にもたどり着きはしない。ゆえに子どもたちに「学びを深めようとする思い」を持たせるには、継続した教師の様々な手立てが必要となる。子どもはこの手立てによってさらに深く考えようとするのであり、自らをふり返ることにつながっていくのである。

#### (1) 一人一人の考えを大切に受けとめあえる

思ったことを発言することが許される学級の雰囲気は、とても大切である。自分が発言しても「聞いてもらえる」という安心感がなければ、子どもは発言しようとはしない。代表者だけの発言では、話し合いの深まりが十分に達成されるとは考えられない。子どもがお互いに認め合い、共に伸びて行こうとする学級であれば、学びはさらに深まっていくであろう。また、このような学級を作るためにも道徳の学習は重要であると考えられる。

#### (2) 資料提示の工夫

魅力のある資料は、それだけで子どもの心をひきつけるものである。しかし、資料の持つ力を十分に発揮させるには、子どもを資料の世界にひきこむことである。道徳では、資料文は一度しか読まない場合や資料文を子どもに渡さないで、教師が読み聞かせるという場合もある。この資料提示の補助として、場面絵だけでなく視聴覚機器を活用したり、キーワードを文字カードにして提示するなどの配慮や工夫が必要である。

#### (3) 目に見える部分「表層」と人を突き動かしている心の部分「深層」に着目

人の行動は目に見えることである。しかし、どんな行動にもその理由があり、背景となる心の働きが存在する。ただ、目に見えるものだけが真実とは限らない。ねらいとする道徳的価値は、行為の奥にある心の深層までたどることによって明らかとなることもある。学習において、資料から発問をよく吟味し、子どもの意識の流れを大切にしながら、表層から深層へとねらいとする道徳的価値へ向かって学びを進めていく過程の中に、深まりが期待できると考えている。

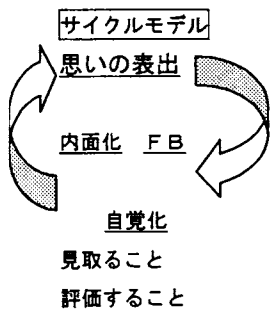
#### (4) 他教科、体験活動との関連、連携

「創発の学び」を進めるためには、道徳の授業だけでなく、授業に関係した他教科や体験活動との連携も重要である。今までの学習や体験活動などの経験を基にした自分なりの道徳的価値のとらえが、関連した道徳授業の話し合いによって補充され、新たな道徳的価値のとらえに気づくことで深化し、これからの実生活に生かしていこうと心の中で統合されていき、さらに次の学習活動や生活へと反映されていくのである。

#### (5) 見取りと評価のフィードバック

ねらいとする道徳的な価値が明らかになったとき、「そのような価値は自分の心の中にもないか」と考えさせることによって実感の伴う学びが期待できる。子どもは自分なりに学んだ道徳的価値を、今後さらにより良い価値として、自分の生活に生かしていけるようになる。

道徳の学習では、サイクルモデルを念頭に置き継続的に実践を進めていく。すなわち、十分に話し合われた子どもたちの意見や学習後の感想（思いの表出）などに加えて、子どもの心の中では、今までの体験活動やすでに学習した教科の関連した内容が、道徳的価値への気づきの深まりを進めていくのである。教師はねらいにせまるために子どもの発言を取り上げて、全体にフィードバックする。フィードバックされた考えは全体に共有され、さらに深く道徳的価値への学びが進んで行く。そして自分をふり返ることによって自分の中にもある道徳的価値に気づく。その後、子どもが家族と共に心のノートに書きこんだり、授業後の感想を学級通信で紹介することにより、子どもを中心に家庭でも道徳的価値のフィードバックが進む。再び学習内容である道徳的価値が想起されて、徐々に内面化されていく。内面化された道徳的価値は、さらに新しい学びの素地となって子どもの生き方に影響を与えていくと考えている。教師は毎日のあらゆる学習活動の中で教師は子どもの変容を見取り、あるときは個別に対話し、あるときは全体の場で、その評価を子どもへ返してやる。評価された子どもは、学んだ道徳的価値について更なる刺激を受けることになる。この見取りと評価の繰り返しが大切である。



#### 参考文献

失敗の事例に学ぶ道徳の授業 新宮弘識・上杉賢士編 (国土社)

道徳・生き生きとした授業を創る 新宮弘識著 (国土社)

子どもと教師の心がはずむ道徳教育—学級経営を基盤として—

押谷由夫・心を育てる教育研究会共著 (東洋館出版社)

平成16年度研究紀要 (本校)

平成15年度小松市立安宅小学校研究紀要

## 4 実践例 -4年-

### (1) 主題名 理解する心 貝がら（4年 文溪堂）2-③信頼、友情

#### (2) 目標

- ・「ぼく」は中山君に関心があり、友達になりたいと思っていることがわかる。
- ・相手の立場や気持ちを考えて、友達を理解しようとする大切さに気づく。
- ・相手を理解しようとする気持ちが、人と人の心をつないでいくことに気づく。
- ・今までの友達関係を振り返り、新たに友達関係を広げて行こうとする。

#### (3) 指導にあたって

##### ① 資料のとらえ

子どもたちは学年が変わるたびに、クラス替えによって今までの人間関係が一度リセットされる。なかには再び新しい人間関係を作るために、苦勞している子どももいる。家が近いからとか、サッカーが好きだからなど、自分との共通項を元にして友人関係を作ってきた子どもたちは、「友達を作る方法」を特に意識して考えたことはないかもしれない。だから毎日の学校生活の中で、お互いに自己中心的に主張し、ぶつかりあい、けんかをして、時間がたてばまた仲良くなるという繰り返しが、子どもたちの人間関係を育てているとも言える。

今年から高学年の仲間入りをした4年生。低学年のときとは変わって、行動力がつき、とかく集団で行動し、深く考えずに失敗してしまうことの多い時期でもある。子どもたちはどんな友達がほしいのだろうか。遊び友達なのか、それとも信頼できる友達なのかと問えば、信頼できる友達がほしいと言うであろう。しかし、どうやって信頼できる友達を作ればいいのかわからずに、試行錯誤の人間関係を繰り返すことになる。

4月からいろいろな機会を通して、相手の気持ちを考えること、理解することの大切さを指導してきた。しかし、学校生活ではなかなか身につけていないのが現状である。そこでさらに本資料を学習することで、今までの学習がつながって、実生活で生かされていくと考えている。

##### ② 本資料における「学びを深めようとする思い」

ア 感想を発表して、資料についての関心を持ち、深めていこうとする内容について気づく。

イ 行動の裏にある登場人物の心の深層を考えることによって、より深い道徳的価値に気づこうとする思い。

- ・中山君は、大切な宝物である「貝がら」を、どうして「ぼく」にくれたのか。

この中山君の、行動の奥にある心の深層を考える。

- ・「ぼく」が、貝がらを見つめながら「今度こそ、仲良くなれる」と思ったわけを考える。

ウ 自分自身を見つめることによって、新しい自分の生き方を見つけて行こうとする思い。

- ・相手の気持ちを理解して行動した経験を想起して、仲良くなるためには大切な要素であることに気づき、大切にしていこうとする。

##### ③ 「学びを深めようとする思い」を育むために

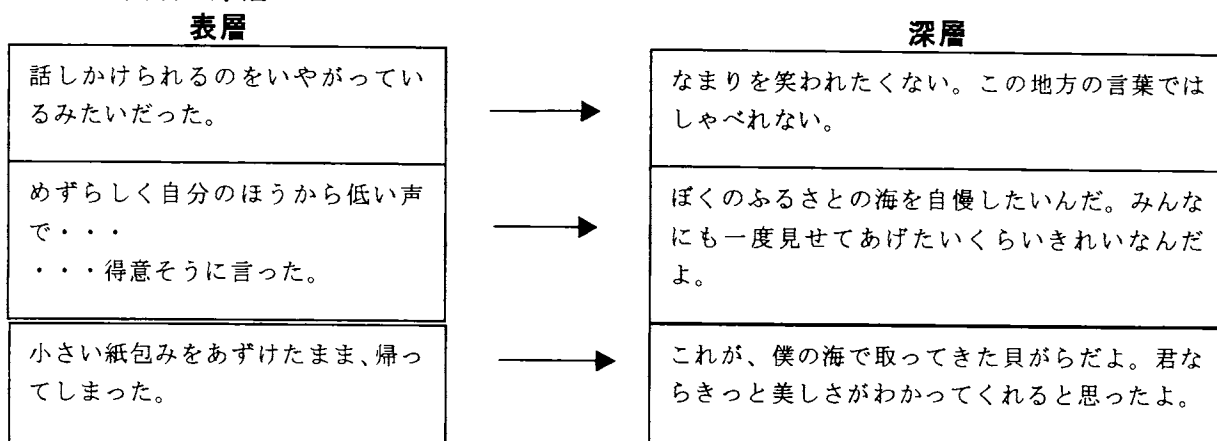
友達の気持ちを考えることについては、4月から道徳や国語の学習において、関連した指導を行ってきた。したがって「思いやり」というキーワードについては、簡単に気づくであろう。今回は、さらに深く相手の気持ちを考えることによって、仲良くなるにはまず

相手を「理解する」ことが大切であり、ここから心の通い合いが始まっていくことに気づかせていきたい。

本資料は、子どもに配布せずに、教師の朗読を一回だけ行う。気持ちを考えるためには、登場人物の行動を確実に押さえておく必要がある。そのため、気持ちを考えるかぎとなる言葉を吟味して、文字カードとして掲示する。「ぼく」の気持ちの変化を追いながらも、寡黙になっていた中山君の口を開かせたのは、「ぼく」の相手を誉める言葉、認める言葉だったことに気づかせ、中山君が宝物の貝がらを届けてくれた本当の意味に迫っていく。なまりを気にしている中山君にとって、言ってほしかった言葉は、自分のふるさとのすばらしさを認めてくれる言葉である。ふるさとの美しさを共に共感してくれた「ぼく」の出現は、ひとりぼっちだった中山君にとって一筋の光明に違いない。だから、わざわざ自転車でやってきて、宝物の貝がらを贈ってくれたのである。「ぼく」なら、きっと自分が描いた絵よりもずっと美しい海のことを、貝がらからわかってくれるに違いないと、思ったからこそその贈り物である。そして、「ぼく」はしっかりとその中山君の気持ちを受け取ったから「今こそ仲良くなれる」と思ったのである。

学習の後半で、今日の学習で気づいた仲良くなるために大切なことを発表させる。いろいろな方法が述べられると思うが、認めてあげて、わかってあげた「ぼく」の行動こそ大切であることに気づかせる。今までにそのような経験があるか想起させることによって自らの行動を振り返り、これからもっと仲の良い友達を作っていってもらいたいと考えている。

#### ④ 資料上の表層と深層



#### (4) 学習計画

主な活動と内容及び・子どもの思考の流れ	評価のポイント
<p>1 教師の朗読を聞いて考える</p> <p>○登場人物の気持ちを考えながら聴く</p> <p>○資料を基に話し合う 「感想を話す」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・中山君と仲良くなれてよかった</li> <li>・中山君を笑った子はひどいな</li> </ul> <p>「中山君が思わずしゃべったのはなぜか」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・絵のことを誉めてくれてうれしかったから</li> <li>・きれいなことを伝えたかったから</li> <li>・自慢したいほどの海だから</li> </ul> <p>「中山君が お見舞いに行ったのはなぜか」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・友達になりたいと思ったから</li> <li>・仲良くなろうと思ったから</li> </ul>	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">資料に集中して 話の内容を理解しようとする</div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;">なまりのことをわすれてしまうほど 中山君がうれしく思った気持ちがわかる</div>

## 主な活動と内容及び子どもの思考の流れ

## 評価のポイント

- ・二人で話がしたかったから

「ぼくは貝がらを見てなぜ仲良くなれると思ったのか」

- ・きれいな貝がらだったから
- ・大切にしていた貝がらをくれるほどぼくのことを信用してくれたことがわかったから
- ・中山君の気持ちがうれしかったから

貝がらをとどけた中山君の心の深層を理解し 中山君と仲良くなりたいという「ぼく」の気持ちがわかる

### 2 本時で学ぶ価値について考え 自分を振り返る

- 本時の学びから 仲良しになるために必要なことに気づく

「仲良しになるために 気づいたことはなにか」

- ・相手を大切にすること
- ・失敗しても笑ったりしないこと
- ・大切なものをあげること
- ・相手の気持ちをわかろうと努力すること
- ・仲良くしたいと思うこと
- ・お互いの気持ちを通じ合わせる

相手を理解しようとする気持ちや大切に思う気持ちが人と人の心をつなぐことに気づく

- 自分を振り返る 授業の感想を書く

「今までに友達の気持ちをわかってあげたことでより仲良くなれた経験はないか」

「授業の感想を書く」

今までの友達関係をふり返り よりよい友達関係を作って行こうとする

## (5) 本資料における授業の実際と考察

子どもが積極的に資料とかかわり、「学びを深めようとする思い」を育てているかを本実践をもとに検証していく。そのために、実際の授業の流れをたどりながら、設定した「学びを深めようとする思い」の現れを見取り、「学びを深めようとする思いを育む」ための手立て(道徳理論 3 学びを深めようとする思いを育むために)を観点として考察していく。授業中の子どもの様子や発言、授業後の感想カードの記録をもとに考察を進めていきたい。

### ①資料提示を工夫する(資料の表層部分の捉え)

今回の資料提示は、子どもに資料を渡さず、教師の朗読のみという方法をとった。登場人物の心情を考えることに重点を置き、資料文の読解に偏らないようにするためである。資料文は4年生の資料としてはやや長い。そのため場面絵やキーワードとなる文字カードを準備した。提示方法は読みながら提示せず、発問にかかわって必要であれば提示しようと考えていた。ゆっくりと丁寧に、子どもたちの反応を見ながら一読したあと、感想を聞いた。初めに感想を聞くことで、子どもたちがどの場面に大きく心を動かされたかを知ることができる。また、そこでどのような考えを持ったかを教師がつかむことができる。この感想の中からさらに深めていこうとする内容について取り上げて話し合うことにより、ねらいとする道徳的価値へとつないでいくことができる。本時で出された感想から、キーワードとなる言葉が何度も出されたので、用意した文字カードはほとんど使用することはなかった。

また、この子どもたちは自分の意見を教師に向かって話す傾向があるので、教師は意図的に移動して子どもの中へ入り、視線を低くして子どもの意見を聴くように心がけた。このようにすることで、子どもたちに向かって話しているようになり、発表された意見を全体で共有できるようになると考えている。

T : 感想を聞かせてください

A児 : お見舞いに自分で自転車で来たところが 心に残った

B児 : お見舞いにたくさんの貝がらが出てきて 絵を思いだした 中山君が海の話をしたときのことを思い出した 中山君は「ぼく」を思っている

C児 : 席がとなりでもしゃべらないのに お見舞いに来るなんて変な人だ

D児 : いつもはしゃべらないけど かぜをひいたときに 思いのこもった貝がらを持ってきた やさしい人

E児 : 隣にいてもしゃべらないのに お見舞いに来るなんて変な人だ

F児 : 中山君がしゃべり方を笑われてから しゃべらなくなったけどだんだん「ぼく」にしゃべることが楽しくなって大きな声になった 本当はみんなに伝えたかったんだ しゃべりたかったんだ

G児 : 最初初めて隣の席になったとき 暗い人だと思っていた 女の子に笑われてかわいそうだった 最後はお見舞いに来てくれて優しいと思った

H児 : 「本当は百倍も千倍もきれいなところ」と言った所が心に残った 中山君はまだ前に住んでいた所がとても心に残っていて絵に描いた

I児 : 初めはほとんどの友達に何もしゃべれなかった 図工の時はちゃんと話してくれた 「ぼく」とは仲良くなれると思ったのだろう 「この子なら大丈夫」と思ってしゃべったのだと思う

J児 : 前に住んでいた所が心に残っている 大切な思い出の品をお見舞いに渡したから 中山君も仲良くなりたいと思っている

資料1 感想より

子どもが感想を話していく中には、取り上げて訂正したほうがよいことも出る。感想の中に、中山君の訛りについて触れた発言があった。

K児 : 中山君は転校してきたばかりで しゃべりにくいのに図工の時間にしゃべったことがえらいと思う

T : しゃべりにくいって？

L児 : しゃべり方がみんなと違って 笑われたりしたからしゃべりにくかった

M児 : みんなと友達になりたかったんだけど 変な言葉だから・・・

T : 変な言葉？変な言葉じゃないよ 何て言うの？

C全 : 訛り

N児 : 訛りがあるから しゃべりにくかったんだと思います

T : 先生が読んでいたときも 笑った人がいましたね 誰が笑ったか覚えていますよ

C全 : .....

T : 面白いと思ったから笑ったんですね では、その地方ではみんな話すたびに大笑いしているのですか

C全 : ちがう

T : 地方では当たり前 普通の話し方なのですよ

資料2 訛りについて

人間はことばで思いを的確に表現できるとは限らない。子どもであればなおさらである。表現が適切でなければその場で訂正する必要がある。地方の訛りは確かにおかしく思えるかもしれないが、その地方の人たちにとっては当たり前に使われている話し方である。だから変な言葉ではないし、悪意はなかったとしても笑うものではない。今まで当たり前だった話し方を笑われてしまえば、もう話したくなくなるものである。中山君の訛りについて取り上げたことで、笑ってしまった周りの人たちの気持ちと、今まで当たり前だったことを笑われた中山君の気持ちの両面に迫ることができたようだ。

## ② 表層から深層へ迫る

中山君がしゃべらなくなった理由が押さえられた所で、「なぜ大きな声でしゃべったのか」「中山君がお見舞いに来た理由」「貝がらを届けたわけ」について、続けて考えていった。これらは、すべて中山君の心の深層の部分にかかわることである。すでに感想を聞いて

た段階で、中山君の心の深層部分に触れる考えが発表されている。場面に分けて板書された感想を元にして、話し合いを進めていった。

そして、適宜に発言を取り上げて別の子どもに問い返すことで全体へのフィードバックに心がけた。

T : しゃべらない中山君がしゃべったのは どうしてだろう  
N児：中山君にとって 前に住んでいた所はすごい所 だから「ぼく」に言われて思わずしゃべってしまった  
O児：思わず言ってしまったということは 中山君にとって自慢できる場所だった  
P児：すごくいい思い出のある場所 その記憶をなくしたくない だからうれしくてつい答えたのだろう  
Q児：絵を描くときに海を描いたのは 自分にとっていい思い出だったから だから「ぼく」が病気になった時 元気になるように貝がらを贈った

ふるさとの海を誉められて、思わずしゃべってしまうほど心が動いたことに気づかせていく。そして、お見舞いの話が出たところで次の発問でさらに深層に近づいて行く。

T : お見舞いに行ったのはなぜかな  
R児：自分がしゃべっても笑わない友達が「ぼく」だと思った  
S児：声をかけてくれたから もっと仲良くしようという思いで来たのだと思う  
T児：普通にしゃべる友達がほしくて 「ぼく」とは友達になれそうなので思いで貝がらをあげた 友達になるためにあげた  
U児：話しかけてくれたのもうれしかったのだろうけど 誉めてくれたこともうれしかった 友達になれると思った

中山君の「友達がほしい」という思いに気づいていく。しゃべらなかつたのは一人が好きなのわけではない。自分をわかってくれる人が現れるのを待っていた。そして、やっと見つけた。この中山君の思いに気づいてから、「貝がら」の意味について思いを深めていく。

T : どうしてお見舞いが貝がらなんだろう  
V児：きれいな海を見せてあげたい 一緒に行きたいと思っていると思う  
W児：貝がらがきれいなら 海もきれいということを知らせたかった  
X児：想像を膨らませてあげたい 海の絵のあとに貝がらを見せたらもっと海の様子を想像できるし 膨らませることができる

中山君は何も話していない。お見舞いに来て、貝がらを置いて行っただけである。この表層の部分から、中山君の心の深層を探っていった。子どもは友達の見解を聞きながら、自分たちで深めていったように思われる。教師が意図的に発問を繰り返さずとも、子どもの思考は、「しゃべった」→「お見舞い」→「貝がら」へと流れて行った。

これは、前半部分で子どもの感想を意図的に三つの場面に分けて板書しておいたため感想で出された思いがきっかけとなって考えやすくなったのではないかと考える。

### ③ 道徳的価値の一般化からふり返りへ(自分自身へのフィードバック)

本時の主題名は「理解する心」である。相手の気持ちを考えることであり、それをまず受けとる心である。人間は言葉によって思いを伝えることができるのだから、自分の思いは話さなければ相手に伝わりにくい。しかし、この資料では中山君は何も話してはいない。話そうと思ったのだろうが、結局話すことができずに貝がらだけを置いていったのである。言葉がなければ思いが伝わらないと言うのであれば、「ぼく」は貝がらを見て不審に思ってもおかしくないが、「今度こそ仲良くなれる」と思ったのである。「仲良くなるために大



切なことは何だろう」この発問に対して、はたして子どもたちはこの不思議な現象から導き出される道徳的価値をどう解釈したのだろうか。

- T : 仲良くなるために大事なことは何だろう  
Y児 : 人の気持ちをわかる心だと思います  
Z児 : 友達になりたいって思う気持ちを持つことも大事だけど それだけじゃなくて 気持ちもわかってあげるから友達になれるのだと思う  
AA児 : 気持ちをわかると言うことに似ているんだけど 前に道徳でやったように言われたらうれしい言葉とかいやな言葉とかもわかって大切にすることだと思う  
AB児 : 人の気持ちがわかって 心が通じ合うことが大切だと思います  
AC児 : 国語の時間に勉強した「三つのお願い」で考えた本当の友達は いつも一緒にいてくれて 秘密を話さなくて相手の気持ちがわかると言うことだった  
AD児 : 思いやりの気持ちを持つことだと思います

資料4 中心発問より

学校で行う道徳教育は、道徳の時間だけで充足されるものではない。全教育課程を通じて行うべきである。子どもは「理解する心」を「わかる心・わかりあう心」と言い換えていた。この難しい内容に対して、子どもの気づきを助けたものは、国語で学習した「三つのお願い」であり、以前にエンカウンターを用いて学習した道徳の学びであった。国語では、やや自分勝手な女の子は、友達がいなくなって初めて、自分のことをとても理解してくれていた友達のありがたさに気づく。そして、女の子は今までの自己中心的な言動を反省する。道徳では、「言われてうれしい言葉」を友達や先生に言ってもらい、どんな気持ちになるかを体験して、話し言葉が相手に与える影響について考えた。

今回の道徳では、中山君の行動の奥にある心の深層を考えることで中山君の気持ちに気づくことができた。子どもたちが気づいた中山君の思いを「ぼく」も気づいて、受け止めたから「仲よくなれる」と思ったのである。この気づきには、先述したようにすでに学習して得た知識や経験へも思考がフィードバックして、関連付けが行われたからといえる。そして、仲良くなるには「相手の気持ちがわかる心」が大切だということに気づいたわけである。ねらいとする道徳的価値が明らかになったこのあとに、今までに自分の気持ちをわかってもらってうれしかったことはないかを聞いた。何人もの子どもが様々な体験にまつわるうれしい気持ちを話し、お互いに聞きあった。

④ ふりかえりから子どもを見取る

最後に授業についてのふりかえりカードを書かせた。学習後のふりかえりは毎回書かせている。内容は「今日、学んだことは何か」と「授業の感想」である。このふりかえりから発言しなかった子どもは、どのように考えていたのか、ねらいとする道徳的価値にどこまで迫ることができたかを知ることができる。ふりかえりは毎回、学級通信に載せて学級全体に返している。

- ・ とてもみんなで話し合い 私が考えていることより色々なことがわかり とても「ああここは こう考えてもいいんだ」と思いました a児

- ・ 思わず笑っても後であやまればいいのにな b児

- ・ 中山君は笑われたとき 本当にかわいそうだったなあと思いました 転校してきたともだちは 仲良くしてあげたいなと思いました c児

- やっぱり友達を作るには みんなの気持ちを分かり合えて心が人と通じ合えて 最後  
に人の気持ちを分かり合えて思いやることがあるとぼくは思いました この中でぼく  
が一番大切だと思うのは人を思いやる心だと思います d児
- 今日学んだことは友達の大切さ 友達を作るときのことです 大切なのは思いやりや  
やさしさです おたがいに声をかけあって気持ちを分かり合うことが大切です e児

#### 資料5 ふりかえりカードより

ふりかえりには、f児のように授業に参加する姿勢について書くこともある。a児は、その後の道徳の時間では積極的に発言するようになって行った。また教師がねらいとする道徳的価値以外の価値に気づいたことも書かれている場合が多い。(本時のねらいは、2-③信頼・友情であるが、2-②思いやりや1-②思慮・反省、見舞いに行った中山君の行動から1-④勇気を見取っている子もいる。)資料の世界に入り、自分と重ね合わせて考えるとき、今までの自分の体験が想起されるからであろう。子どもたちが真剣に資料と向き合い、一人一人が自分なりの「学びを深めようとする思い」をもって考えるとき、道徳的価値は一つの方向に必ずしも集約されるものではない。子どもによって色々な気づきがあるほうが自然であり、自分を振り返っているといえると思う。ただ、教師のねらいに対して適切な支援があれば、どれもねらいとする道徳的価値の方向へ近づいていくといえるのではないかと思う。「資料5」のb児の意見は、思わず笑ってしまった周りの子と自分を重ねて見ている。b児は、少年野球を習っていて、本校以外の友達も多い。彼は、「思わず笑ってしまったって、相手がいやな顔をしていると気づくことが大切で、笑うことは中山君にとって嫌なことなんだとわかったなら、あやまればいいじゃないか。そうすれば仲良くなれるよ。」と言いたいのである。またc児は、昨年転校してきた子である。昨年の自分を中山君に重ねて振り返っている。今では多くの仲の良い友だちに恵まれているが、転校早々の辛かった思いがふりかえりに表れている。

#### (6) 授業を終えて

授業は、45分を越えた。ふりかえりを書く段階までに60分もかかった。時間が過ぎてしまっていたあせりから、せつかく子どもたちが良い意見を述べているのに、ねらいとする「理解する心」(子どもは、わかりあう心と言っていた)をはっきりと明示せず自分へのふりかえりに入ってしまった。教師がこの時間に何を伝えたいのかをはっきりとしなければ、子どもたちは何をふりかえればいいのか、何を学ばばいいのかが曖昧になってしまう。それでも振り返りの発言が続いたのは子どもたちが教師の意図を汲んでくれたからであろう。しかし、明示していればより多くの発言があったかもしれないし、ふりかえりを書くときにも道徳的価値がぶれることはなかったのではないかと思う。また、中心発問以降の話し合いでは、感想を述べた子どもの数と比べて発表した子どもの数が約半数になった。感想のときに意見が続いたので資料を理解できたと思いこんでいたが、実は半数しかいなかったのだろう。やはり、気持ちを考える上でかぎとなることば「キーワード」を提示するべきであった。約半数の子どもたちは発表される意見を聴きながら、資料の理解を進めていたのである。また、「訛りを笑う」ということに心を留めた子どもたちが多かった。ねらいとははずれるが、このことについても立ち止まって話し合いを持ったほうが、資料からより多くのことを学べたと思う。教師が、子どもたちの声に立ち止まり、取り上げてフィードバックさせていけばもっともっと深められる学びがあると思う。子どもたちは道徳の時間を楽しみにしている。道徳で学んでことを実践できたとうれしそうに報告してくる子もいる。そんなときは大げさに取り上げて、学級全体にも伝え学級通信で家庭にも伝えることにしている。そして、暖かい拍手が巻き起こる。拍手を受けた子はその経験が強化されて心に残ったことだろう。道徳的実践力をつけさせることは容易いことではないが、子どもたちが意見を述べ合うその中から大切なことを見つけ出していきたい。これからも心を耕し、心に栄養を送り、心を育てる道徳の授業を大事にしていきたい。